

# 2009 年 春学期レポート

第3期生 管野奈津美

<はじめに>

今学期は大学院に入って2度目の学期であり、前の学期と比べて少しは余裕ができるかと思ったがさらにハードで相変わらずとても慌ただしい学期となった。今学期も秋学期に続いて4クラス履修した。クラス履修状況は以下の通りである。

Monday	Tuesday	Wednesday	Thursday	Friday
		9:00- 11:50 Linguistic Features of ASL for Deaf Studies		9:30- 12:20 Enforcing Normalcy: Deaf and Disability Studies
	1:00- 3:50 Critical Pedagogy		1:00- 3:50 Linguistic Features of ASL for Deaf Studies	

<クラスの様子>

### 1. ASL795 Special Topics: Linguistic Features of ASL for Deaf Studies

ASL(アメリカ手話)を言語学側面から分析するクラスである。初めにASLがどのように分析され言語として認められるようになってきたのか、そして手話を言語学的に分析するときの方法はどのようなものがあるのかを学んだ。次に言語学の理論に基づいて手話の言語学的なシステムがどのように構成されているのかを学んでいった。宿題やテストももちろん手話の動画を撮って提出しなければならないのだが手話の動画をオンラインにアップロードして先生だけが見ることができ、しかも手話でコメントをつけられるというGallaudet Universityならでのテクノロジーテクニックがあり、それを活用した。手話で提出するのは英語で書くより簡単だと思われがちだが序章から結論までの流れや的確な説明などのアカデミックな技術はペーパーと同じレベルを問われるので先生の評価も厳しく、ポイントを的確に整理して手話で説明しなければならない。最終プロジェクトの課題は今までこのクラスで学

んできたアメリカ手話の言語学理論を日本手話に応用してみるというものであった。私自身、日本手話についても今まで言語学的側面から見たことがなかったのいい機会になった。分析してみると意外とアメリカ手話と共通する部分が多く、同じ基本的な言語構造を持っていることがわかった。分析を通して日本手話がどのように構成されているかほんの少しだけだが理解できた気がした。自分でも日本手話が何故言語と言われているのかわからず、自信がなかったのだがこのクラスを通して理論を学ぶことができ、少しだけだが自分でも手話が何故言語なのか説明できる自信がついたのではないかと思う。ぜひ多くのろう者に受講してほしいと思ったクラスである。

## **2. DST 710 Literary Traditions in the Deaf Community**

アメリカには昔からろう者のコミュニティの中で引き継がれてきたアメリカ手話によるストーリーがあり、それについて学ぶクラスである。ろう文化ともつながりが強く、外国の童話を読んでその文化を感じ取るのと同じようにASLストーリーを分析していくと背景にあるろう者の生活や文化を感じ取ることができて面白い。手話は視覚言語のため、文書には記載できないのでろう者のコミュニティの中で人から人に伝えられてきたが、今はビデオやDVDもあるため、手話によるストーリーを保存して分析する動きが広まっている。アメリカには何人か有名な講談師

(storyteller) がたくさんおり、先生自身もその一人である。Gallaudet Universityでもたびたび、手話ストーリーのイベントがあり、ろう者の間では人気らしい。まず口承による語りの理論を学び、その理論を手話によるストーリーに応用し、手話によるストーリーの動画を見て分析していく。一般的なストーリーからろうをテーマにしたストーリーまで幅広くあり、本当に鑑賞して楽しい。特にろうをテーマにした話は数多くバリエーションがあり、日本で手話による語りを生で見たことがなかったのでショックを受けてしまった。先生がたまたま持っていた日本手話の手話語りのビデオを翻訳してほしいと頼まれたのでそれを最終プロジェクトにした。日本も90年代から手話語りのビデオが出始めているが最近のイベントで有名なのはDROPの手話語りであろう。それを含めたいくつかのビデオを鑑賞し、それを分析した。日本の昔話を手話にしたもの、それをろう者向けにアレンジしたもの、ろう文化や手話をテーマにした話などジャンルは様々である。特にろう俳優として有名

な米内山さんの手話語りが一番興味深かった。ろうをテーマにした話「葬式」「恐山」がとても面白く、それをアメリカの手話ストーリーと比較し、分析した。これから日本での手話語りがどのように展開されていくのか注目したい。

### 3. DST712 Enforcing Normalcy: Deaf and Disability Studies

世界中でろう者は社会では「聴覚障害者」として扱われている。なぜ、「障害 (Disability)」という言葉があるのか、ろう者は何故長い歴史の間、障害者として扱われて来たのか。それについて学ぶクラスである。アメリカでは黒人などの人種差別や女性差別もあり、アメリカの差別の歴史についても学ばなければならない。初めにアメリカでの障害者の扱われ方や歴史について学んだ。「Disability (障害)」という言葉が現れたのが産業革命の後であり、産業革命が人々を働ける体を持つ人々と働けない体を持つ人々に分けてしまったことが発端とされ、そこから Disability という言葉が生まれたとされている。アメリカでも過去には実際、障害者の中絶や生殖器の除去、ろう者同士の結婚を禁止する動きなどがあった。あまり知られていないが、ユダヤ人大虐殺で有名なドイツのナチスも、ろう者を含むドイツ人障害者の生殖器を除去する法律を作り、しまいには大虐殺している。そのような歴史も交えて議論した。さらに今では遺伝子治療で遺伝を操作できるようになり、障害を持つ遺伝子を除去できるテクノロジーも研究されるようになってきた。それが現実になったらどんな未来が待っているのか…。最も印象深かったのはクラスで「ガタカ (Gattaca)」という映画を鑑賞したことである。その映画は近未来、出生前の遺伝子操作により、生まれながらに優れた知能と体力を持った「適正者」が優先され、「欠陥」のある遺伝子を持ちうる自然出産により産まれた「不適正者」が差別されているという設定で、「不適正者」である主人公が宇宙飛行士になるために「適正者」の血液と指紋を借りて「適正者」になりすます話である。もし、それが現実になったら、聴覚障害を持つ人々は「不適正者」になってしまう。近い未来遺伝子研究が発達した場合、例えば病気の遺伝子を持つ人々は結婚を認められない、生命保険には入れないなど、遺伝子による差別が起きる可能性があり、とんでもないことになるのではという議論を交わし、とても興味深い議論であった。最終プロジェクトは3グループにわかれてチームプロジェクトであった。私のチームはムービーの制作が課題となり、今学期を通して学んできたことを応用しなければな

らなかった。これまで障害者として扱われてきたろう者だがこれからどういう存在意義を持つのかという観点から「何故ろう者は地球上に存在するのか？」というテーマで制作した。障害者としてのマイナスの観点からではなく、手話という言語を操る者として社会にどのような還元を与える存在になりうるのかという視点からろう者を分析した。チームワーク作業ということもあってとても大変で根気のいる難しい作業だったが、手話という言語、視覚を使った感覚、世界中に散らばっているろう者のコミュニティ、文化の多様性などの観点から制作し、いい経験になった。

#### **4. DST714 Critical Pedagogy**

教育による抑圧について学ぶクラスである。本当の教育とは何か？自分が受けて来た教育は正しいのか？と自問しながら今まで受けて来た教育方法を批判的に分析していく。教育はもともと政府とのつながりも強く、政府の政策に影響を受けていることが多い。政治や教育上のシステム、政府の教育や言語についての政策も交えて議論していく。それをろう教育にも応用していき、ろう児やろう者にとって本当に正しい教育方法は何かと考えなければならない。そもそもアメリカでは人種差別が激しく、教育者のほとんどは白人のため教育現場でも人種差別が起きている。人種差別がクラスの中でどう影響していくのかも考えなければいけない。「被抑圧者の教育学」の著者として有名な教育者パウロ・フレイレは現在の銀行型教育を批判している。銀行型教育とは、教師は空の銀行口座のような生徒に、まるで預金を繰り返していくように知識の伝達を行う教育形態を例えている。その教育形態だと生徒は教師に従わなければならない、教師は正しい存在でなければならない。それは社会における抑圧的な態度や行動を助長してしまうと彼は警告している。生徒は常教育による支配に対して疑問を抱き、それと向き合っていけなければならないとしている。そのクラスを通して自分が受けてきた教育を振り返って客観的に考えることができ、すごく考えさせられた。自分が受けてきた教育は正しいと思ってきたが本当に正しかったのだろうか…と。日本や韓国の学生はアメリカとは違った教育システム、教育方針、クラスでの活動スタイルが異なる。その観点から最終プロジェクトとしてアメリカの教育システムを分析することにした。日本や韓国の教育は詰め込み型教育で、クラス内では先生を尊敬しなければならない、最後までおとなしく講義を聞いていることが多い。アメリカはディスカッション形式が多く、クラスで

も意見交換が活発でレポートが多いなどが特徴だ。日本、韓国出身の2人の学生にインタビューし、それをもとに調査した。インタビューをもとにしたムービーを制作し、2人ともインタビューの中で「アメリカのクラスで先生が話している中でも生徒がそれを遮って質問するので戸惑った」「自分の経験とか意見とかどンドン言うのでびっくりした。日本や韓国だったら先生に生意気と悪く思われる」などの率直な気持ちを語っているムービーを最終プレゼンテーションで見せたら先生やクラスメイトに「アメリカの教育形式を客観的に見ることができる良い題材だ」ととても好評だった。

#### <オバマ大統領の就任式>

学期が始まる前日の1月22日にオバマ大統領の就任式があり、オバマ大統領の姿を一目見ようとアメリカ中から人々が集まってきたため、ワシントンDCは今までにない人混みだった。私も一目見ようと出かけたがすごい人混みで中心地にすら近づけず、結局あきらめて家に帰り就任式のスピーチをテレビで観た。オバマ大統領を生で見ることができず残念だったが、就任式が行われたワシントンDCに実際に住んでいて雰囲気味わうことができただけでも、歴史的瞬間に立ち会っていると実感できた一日であった。



議事堂に向かう人々…なんてすごい人混み！！



オバマ大統領の就任式のスピーチ。字幕がリアルタイムで付いている。

#### < Gallaudet University の卒業式 >

5月15日に140回目の Gallaudet University の卒業式が行われ、来客席から見学した。去年も見学したのだが、学長も来賓も学生代表も全員手話でスピーチし、卒業する学生が一斉に両手を挙げる（ろう者流の拍手）光景はいつ見てもとても圧巻である。世界でただ一つのろう者のための大学の卒業式だといっても過言ではないだろう。卒業証書を受け取ったときに「パパ、ママ愛してる！」「My family！ありがとう！」と来客席の家族に向かって手話でメッセージを送る学生、「I did!」と拳を掲げる学生、受け取った卒業証書にキスする学生、母国の旗を誇らしげに掲げる学生…数多くのろう学生が嬉しそうに卒業する姿を見ているだけで楽しい卒業式だった。特に学部の学生代表2人が熱意あふれるスピーチの最後に「なんと我々の卒業証書にはダビラ学長とオバマ大統領のサインが署名されるのだ！ Yeah!」と締めくくっていたのがとても印象的であった。今回は同じ奨学生である池上さんと高山さんが卒業なさり、その姿を見届けることができた。本当に二人が一生懸命に勉学に励んで来た姿を見てきたので努力がかなって満面の笑顔で卒業証書を受け取る姿は本当に勇気づけられた。来年は信じられないが、無事に論文査定に合格すれば、私自身が卒業する予定である。今回の卒業式で卒業した先輩の姿を励みに来年出席できるように頑張っていきたい。



ダビラ学長の卒業式でのスピーチ



1期生の池上さんと



2期生の高山さんと

### <美術館のアートツアー in DC>

ワシントン DC のアメリカ美術館(American Art Museum)で行われた手話のアートツアーに参加してきた。私が今まで受けたことのあるアートツアーのイメージとしては学芸員が手話通訳を連れてくるというものだったが、このアートツアーは違った。ろう者が前もって学芸員によるワークショップを受け、ツアーで作品について手話で説明するというものだった。40分ほどの短いツアーだったが、ろう者によるツアーはなかなか良いと思った。発案者はろう者のアート専攻の大学院生らしいと友人から聞いた。アメリカでもまだまだ数少ない試みらしく、試行錯誤の段階であるらしい。ニューヨークの美術館でもろう者に対するツアーをやっているらしく、時間のあるときに訪れたい。私が以前に掲げた留学目的の一つが美術館のろう者に対するサービスの調査なので、学業の合間に各地の美術館を訪れて詳しく調査していきたい。



作品について手話で説明するろう者スピーカー

### <この学期を通して&来学期に向けて>

今回 Deaf Studies 全般にわたって深く学べたように思う。今学期で得た知識や経験をデフアートの研究や調査に応用できるのではないかと思う。来年度は卒業に向けて修士論文を執筆しなければならない。プレッシャーは重大だが、無事に卒業できるように頑張っていきたい。留学生活残り1年となるので後悔のないようにやっていくしかない。